

第二回 日仏セミナーに於て発表…フランス・パリ第一大学

# 新しい教化路線を求めて

—15年の軌跡とその成果—

黒田武志

私は、日本の横浜・善光寺の住職黒田武志(大圓)です。

今回は、新しい教化の実際と、日本の社会、ひいては世界における仏教寺院の役割と檀家組織との関わりといったことを、かいづまんで申し上げたいと思います。

## 日本における仏教

日本の仏教は、およそ一、四〇〇年前、インドから中国大陸、朝鮮半島を経由して伝えられ



ました。日本の生活、文化に及ぼした仏教の影響力は決定的なものがあります。仏教を抜きにして日本を語ることはできません。

日本の仏教は大乗仏教の系統であります。様々な宗派に分かれております。およそ七万五千の寺院、約十万人の僧侶、約数千万人の仏教徒の大部分は、天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、臨濟宗、日蓮宗、その他いずれかの宗派に属しております。そしてその宗派にはそれぞれの宗祖がおり、本山をピラミッドの頂点として全国各地に末寺があり、地域的に檀信徒と密接的な交流をはかり、布教活動につとめております。曹洞宗の場合は道元（鎌倉時代に中國から禅を持ち帰った曹洞宗開祖）、瑩山（鎌倉後期道元の開いた曹洞宗をひろく世に知らしめた高僧）両禅師、淨土真宗の場合には親鸞聖人といったようになります。

私の善光寺は、曹洞宗（日本最大の佛教教団）



坐禅を主とする禅宗）と申しまして、いわゆる禅宗の一派で、およそ一万五千カ寺の寺院数と二万人の僧侶と約七百万人の檀信徒を擁する日本最大の佛教教団であります。日本は佛教の盛んな国であるといわれております。確かに全国にはたくさんの寺院がありますが、そこでは日本民族固有の祖靈信仰と結びついた祖先崇拜の儀礼（亡くなつた人は家族や子孫を常に守護してくれる靈として敬い、定められた年数毎に、その人の供養をする法事を行います）、が宗教活動の多くの部分を占めており、肝心の佛教の教義を学び理解し、佛教が果たさなければならぬい現代社会ないし世界平和への役割を実践している寺院は少数であります。

## 私の寺院経営の実際

さて、私は十八年前にゼロから新寺を建立し、現在では檀家（つまり特定の信者）数は一千六

百軒を超えております。これは驚異的発展であるとされて、各方面から様々な取材を受け、新聞やテレビで報道されたり、発表する機会も数多くありました。ここで簡単にその経過をのべてみたいと思います。これだけの檀家数を短期間のうちに確保できたのにはそれなりの理由があります。それは死者を葬ることと、その後の供養（年回法事）を寺院経営の主たる柱とし、現に生きている人々の心にやすらぎを与える宗教本来の使命に欠けていたる現代の日本佛教なし、寺院のあり方に疑問を感じ、その本来の使命と役割を發揮する為にはどうしたらよいかと模索しました。たとえば、まず周囲の人々の心を捉えることが先決と考え、子供たちを寺に親しませようと、日曜学校を開き、ボーカル・ダンス運動の育成に力を致し、また少林寺拳法の練習にはげむ少年たちの坐禅指導をしたり、瑩山禪師の教えの通り、檀家を敬うこと仏のごとく

相対した。こうした努力の積み重ねと多くの方々が共鳴して支持して下さった結果にほかなりません。これは寺院の事業を行う際の大きな推進力となります。

#### 新寺建立から現在までの主な経果

1、一九六一年、林和尚が私の師父、黒田白純大和尚の勧めにより、善光寺の現在地に小庵を建てたが、志半ばにして一九六八年この世を去つた。

2、  
①その翌年の一九六九年、アメリカでの修行を終えて帰国した私はこの話を聞き、すでに人手に渡っていたこの小庵を六百万円（一六、七〇〇ドル）で譲り受けた。もちろん借金である。この小庵は横浜市営日野公園墓地の正門脇にあり、将来有望だと判断したからである。

②同年十一月、宗教法人「善光寺」の認証を得、大阪の成寿堂本舗ナリス化粧品（現

在の株式会社ナリス化粧品）社長村岡満義氏を開基（寺の開創の基礎を造ってくれた人）、師父、黒田白純大和尚を開山（寺の開創者）として勧請し発足した。村岡氏との関係についてはあとで述べる。

3、  
①一九七〇年一月八日、本殿及び客殿二〇m<sup>2</sup>を建立した。工費は三五〇万円（一ドル）、併せて土地五四一m<sup>2</sup>を購入した。一六四〇万円（四五、五〇〇ドル）。資金は村岡氏及び同会社社員一同よりの喜捨一千万円（二七、八〇〇ドル）を投入し、残金は翌七一年に完済した。

4、  
①一九七二年七月、本堂及び客殿二四八m<sup>2</sup>の増築に着手し、十一月に竣工した。工費一、八〇〇万円（五〇、〇〇〇ドル）。

②檀家数（特定の固定した信者）四六〇世帯に達したので、五ヶ年計画を樹立し檀徒数一千世帯確保を目指し各種行事の展開を

はじめた。

5、①一九八〇年、目標をはるかに突破して檀家数一六〇〇を超える。

②かねて念願の釈迦殿建立の構想を発表し、翌八十一年五月着工。八十二年十月竣工する。総工費、土地取得費を含めて三億七千万円（一五〇万ドル）。

③旧館の増築に五千万円（一〇〇、〇〇〇ドル）を投じ、八十三年工事完了。

6、一九八三年、開創十五周年記念式典を挙行する。檀徒数一千世帯となる。

7、一九八四年、善光寺海外留学僧派遣育英会を設立する。現在第三次の留学僧を海外に送っている。

（注：円・ドル共、当時の資料に基づく。）

以上が、全くのゼロから出発して現在に至る軌跡であります。これを可能にしたと思われる要素は何であるかというと、立地条件に着眼



パリ第一大学前にて

したことです。立地条件とは、墓碑二万基を擁する壮大な横浜市営日野公園墓地の門前にあるということです。そしてこれら墓地所有者の三十パーセントは所属する寺院を持たないという現実がありました。それに加えて、横浜は長崎、神戸、函館と並ぶ日本の代表的な港であり、国際都市であります。私はこの立地条件を生かして、修行の場として、布教の拠点として、さらには檀信徒の研修センターとして仏教の国際的使命を果たす拠点として理想的な寺院を創ろうと決意したのです。そしてこれを支えるものは誠意をもってひたむきに事にあたる実践と信念のみであります。誠心誠意つとめることによつて周辺の多くの方々から有形、無形の協力を得ることができ、檀家との交流を密接にしたために地域の人々から口コミでどんどん拡がつていきました。

もともとお金はありませんでしたから全部借

したことです。立地条件とは、墓碑二万基を擁

金です。しかし借金は日々返していけばいい。

私のお金だと思えば出したくもなくなるかも知れませんが、私のお金ではありません。檀信徒の方々から預ったお金ですから、仏法の為に用いて檀家に還元するのは当然の理であります。

お葬式や法事など、日常を支える厳粛な儀式をリードすることもあり、まずその意味を説くことからはじまります。お通夜には生死について説き、葬儀に当つては曹洞宗の法式に従つて「剃髪」（頭髪をそりおとすこと）により煩惱を除き、懺悔せんげによつて心を淨め、三宝帰依によつて心を定め、戒律を守ることによつて生活の純化をはかる「受戒」の意味を教え、肉親の死に揺れ動く遺族の気持を安心に導く。単に儀式を司るだけではなんの為の葬儀かわかりません。

ひとつひとつの儀式の意味を説きながら死者を仏弟子として成仏に導くと共に、「安心」を与えることが最も大切なことであります。死者を仏

弟子としてみ仏のもとに送る心のやすらぎを得てはじめて檀徒の方々は「寺」と「僧」に対する認識と信頼を新たにするのであります。しか

し、「死」に関わる葬儀や法事だけでは、本当に寺院としての役割を果たしたことにはなりません。

私は、理想的な寺院、布教の場として檀信徒の研修センターとしてそれまで縁のなかつた若い人々が、お寺に対する認識を新たにしてほしいとの願いから、その第一歩として、子供たち対象の日曜学校からはじめました。はじめのうちは思うように集まりませんでしたが、しかしとえひとりでも、誰もこなくとも、必らず継続してまいりました（たとえば紙芝居、仏教の聖歌）。お寺へ引き寄せる為には多彩な行事を繰り返し続けなければなりません。この日曜学校を手はじめに、数々の行事を設けました。

現在、定例になつている諸行事を次に挙げて

みます。

## 1 週間の行事

- 写経会 每月第二土曜日
- 参禪会（一般の部）毎月第二日曜日
- 茶道教室 每月第一・第三木曜日
- 少林寺拳法参禪法話会 每月第一・第三木曜日
- 書道教室 每月第二・第四土曜日
- 仏典研究会・その他を継続している

## 2 年間の行事

- 新年祈禱会 一月十日
- 節分会 二月三日
- 開山忌 二月七日
- 青年会総会 二月二十一日
- 春彼岸法会 三月十九日
- 花まつり法会 四月八日

- 婦人会研修会（婦人会総会）

五月十日

○不動明王大祭

(大般若法会)

五月二十八日

○大施餓鬼法会

七月九日～十日

○棚経（お盆供養）

七月十三日より

○本寺光真寺参拝

九月十五日

○医事・身上相談

○秋彼岸法会

九月二十一日

○七五三祈禱会

十一月十五日

○お茶会

十一月二十五日

○成道会

十二月八日

○『成寿』（善光寺機関誌）発行

年三回発行（不定期）

これらの行事に於ても必ず法話をを行い、福引きやバザー、あるいは芸能人を呼んでの清興を催すことなどもします。これは寺に親しんでもらい、寺を檀信徒および檀信徒相互の心のふれあいを深める場とするための手段であります。寺は決して人間の死のみに関わるだけの場



セミナー風景

所ではないこと、喜怒哀楽すべての心のその折り折りに関わることのできる開かれた場所だという認識が必要であります。

その他不定期にボーカルや会社、団体、大学生などへの講演があります。

諸行事を行つておりますとまさにフル回転であります。しかも、学ぶのが檀徒なら、指導する者もまた檀徒です。これだけ多数の檀徒があれば、あらゆる分野の専門家が揃うことになり、さまざまの職種での第一人者が寺のブレーンとなつてくださるからこそ、こうした企画も実を結ぶのです。人との出逢いのありがたさを痛感したからこそ、のちに述べる人づくりこそが寺づくりであると思い至つたわけです。

人はひとりで生きているのではない。仏とそして有縁無縁の多くの人たちによつて生かされているのであります。そのことに気づかせていただいたのは日本一周の行脚と世界各地を巡り

歩いた修行によつてであります。以下、その経緯を簡単に申し上げましよう。

## 放浪の修行体験

私は八人兄弟（長兄夭折）の六男として生まれましたが、父は大変厳しい師匠でしたから、小さい時から法務を叩き込まれました。苦しい生活の中から駒沢大学の大学院人文科学研究所仏教学専攻修士課程を修了させてもらい、そのまま曹洞宗大本山總持寺（横浜市。鎌山禅師の創立）に修行のため上山し、十月にもうひとつの本山永平寺（福井県にあり、道元禅師の創立）に上山し修行しました。これは僧侶となるための一般的課程です。しかし私は、多くの僧侶が踏む一般的課程では満足できませんでした。伝統的、形式主義的な仏教的環境（形を尊ぶことに重きをおく修行）に身を置くうちに、いつの

間にか自分の奥深いところから湧き上つてくる仏教への疑問、教団や寺院への疑問、そして自らへのきびしい反省がありました。こうしたことをしているだけで良いのだろうか。私は果して僧侶として存在意義があるだろうか、と疑問と不安と焦燥に明け暮れました。

やがて私は悶々のうちに永平寺から下山しました。私は自分自身を寺院以外のところでとなりなおしたいと決意したのです。もちろんその時、私の懷中にはわずかなお金しかありませんでした。身につけていた衣一枚が全財産といつてもよいのでした。手持ちの金ギリギリで切符を買い、東京へ帰ろうとしたのですが、プラットホームの両側に列車が入つており、発車のベルが鳴つていましたので走つて飛び乗りました。ところがそれは、東京とは反対に行く列車だったのです。やむを得ないので富山という所で降りて後輩のいる寺をたずねて一夜の宿を借りまし

た。ここで托鉢を勧められたことがきっかけで日本一周行脚あんきやがはじまつたのです。富山は仏教のさかんな地方でありますから一日の托鉢で八〇〇円（約二ドル）ほどいただき、こんなに集まるなら能登の大本山總持寺の祖院まで行こうと決心したのが始まりでした。

行脚の途中、京都の郊外でのことです。雨の日が続いて、つい涅槃金（不慮の死に会った時の葬式料）を使い切つてしまふことがあります。木賃宿で残つた二十円（五セント）を見つめながら、茶わん一杯の茶とコッペパンをかじり、人間の生命は何て安いもんだろうと思いました。翌日も雨です。

「今のオレに、一体何ができるんだろう。」と自問自答しました。

「そうだ、オレは坊さんだつたんだ。お経をあげることが仕事ではないか！」

そう気がついて、宿の主人のところに行つて

お経をあげさせて下さいと頼みました。衣は汚れ、雨に濡れていましたが、宿の主人は快くお経をあげさせてくださいって、その上、あたたかな白いご飯を供養してくださいました。それ以上甘えるわけにはいかないと思って、ドシャ降りの雨の中に飛び出して行きました。しかし、誰も喜捨してくれる方はありません。午後になつて、雨が止みはじめた頃学校帰りの女学生がたくさん現われたので、学生に向つてお経を唱

えると、三円（一セント）五円（二セント）とみるみるうちに應量器（供養を受ける入れ物）にお金が入つてくる。その時でした。太陽がパアーッとさしたんです。

「ああ、私は生かされているんだ。人間は絶対に死はないんだ。」と、実に感動的に確信したのです。それが私の人生の基礎になりました。私はそうして救われてきましたから、何も動づるものはありません。こうした苦境のなかで、

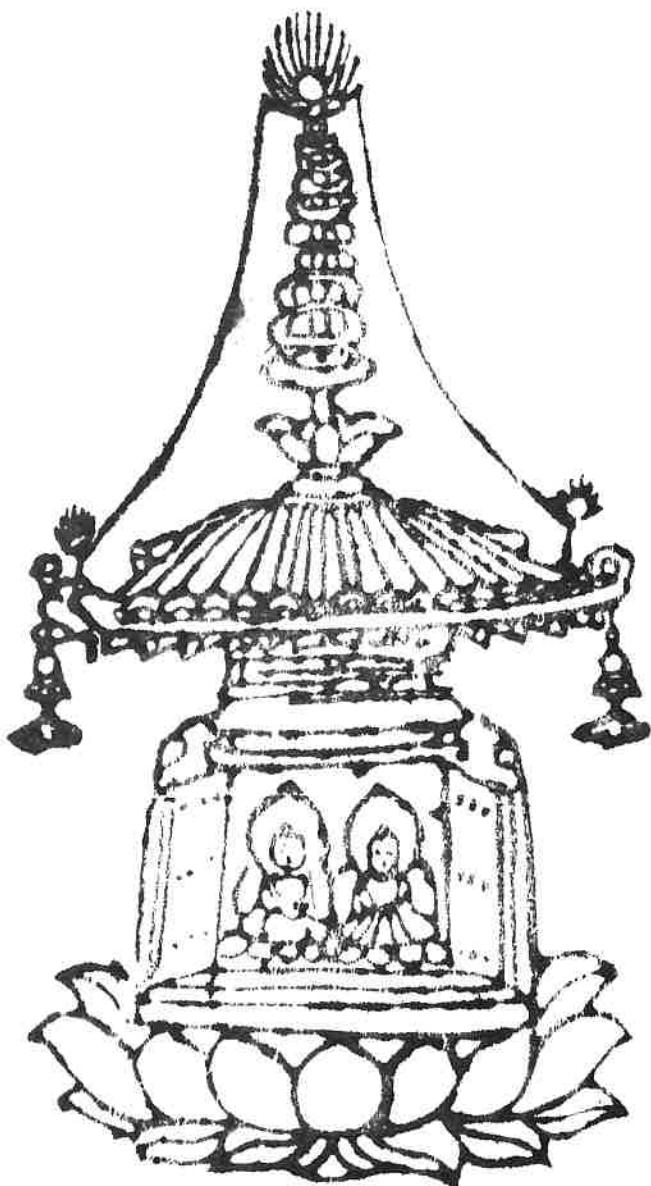
女学生の三円（一セント）、五円（二セント）に救われたのです。このことは、生涯忘れ得ぬだろうと思ひます。

やがて日本一周を終え、總持寺の特別僧堂（宗門全体から毎年五人の優秀な僧侶を選び、永平寺・總持寺両大本山で、三カ年の特別修行を受けさせる制度）の第一期生に應募しましたが、やはり形にはまつた生活は私の性に合わず、いよいよ海外に出る決意をいたしました。

宗派にとらわれた日本の仏教ではなく、その根幹を成すものあるインド。そこへ行こうと思つたのです。ところで、インドに行こうにも金がない。そこで後に開基家となつたナリス化粧品に借金を申し込みました。五十万円（一、四〇〇ドル）貸してほしいと直談判したのです。おかげで私の誠意が通り、金一封をいただいたのですが、さて、ペチャンコののし袋に果して五十万円（一、四〇〇ドル）という大金が入つ

ているのかどうか、私は本当に不安でした。誰もいないところにきて恐る恐るあけてみますと、五十万円の小切手が入っているではありますせんか。私は「バンザイ！」と跳び上がりまし

た。これでインドへ行ける、行くのならインドだけでもつたいないということになり、上座部仏教といわれる一二七の戒律を守るタイ仏教を実地に修行してみようと、ここで一年半にわ



たるタイの修行が実現したのです。

帰国してみると、仏教は正に大乗仏教抬頭前  
の部派仏教の様相を呈した併他的な教条主義  
が、その大勢をなし、また葬式や法事という人

間の死のみに関わる形骸化した空虚なものによ  
うに強く感じました。そこで私は宗祖を通して  
釈尊の本源に還り、宗派を超えた全一的な仏教、  
実存者の教化救済の重要性を痛感し、そのため  
にはまず広い視野に立脚しなければと思い、再  
び海外に活眼を開こうとしました。その頃、兄  
はロスアンゼルス禪センターを開いておりまし  
たので、兄にユネクションをつけて、そこで開  
教師として二年間勤めさせていただきました。

当然ながら、ここでも苦しい生活をいたしました。  
た。お金がないなら何をするか…。本を読むこ  
とと坐禅をすること、そしてその日その日の出  
来事を書き綴ることしかありません。三十年來  
続いている日記は大変な量となつて書庫を占め

ております。また、日本の宗教関係の新聞に記  
事を送り続けました。そんなアメリカの生活の  
中で、私はひとつの大誓願をたてたのであります。

釈尊の説かれた何物にも片寄らない中道の教  
え、捉われやこだわりのない空の教え、すべて  
は因縁によって生起するという縁起の教えをも  
つて人々の心を救う正しい教えを高揚し世界平  
和と人類福祉の向上に貢献すべく、多くの人々  
の心の憩いの場所をつくるために「日本に帰つ  
たら新寺を建立しよう」と決意しました。

帰国した私は、三日後に友人の結婚式に出な  
くてはならなかつたのですが、着ていく背広も  
靴もない。あるのは穴のあいたボロボロの靴一  
足でした。こんな具合でしたから、借金は苦に  
ならなかつたのかもしれません。借りたといつ  
てもお金はお金です。

さいわいにして前述のように、小さいとはい

え小庵が手に入ったのですから、あとはやみくもに働いて働いて、けん命にお返しました。

## 恵まれた出逢い

こうしたどん底の中で私と共に苦難の道を歩んでくれたのが家内です。寺院運営の実務を担当してくれて、今日までの善光寺の歴史があるのです。

次に開基となつてくださつたナリス化粧品の社長との出逢いは、私が総持寺で修行中の夏季攝心（五日間の連續坐禅）においてであります。坐禅実修のために上山しておられたナリスの社員の方に、私は思い切り警策きょうさくを打ち下ろしておりました。たとえ短期間といえど仏弟子となつた人間は、ただひたむきに坐すべしと思つたかららの策励です。それをきっかけとして、私がナリスの社員教育に呼び出されました。しかしこれは、参禅会の警策に対する遺恨試合ともいえ



るもので、社員十五名ほどが、警策を受けるための合掌をしつづけている。合掌されれば叩かねばなりません。絶え間なく警策を受ける社員の衣服は破れ血がにじみ、打つ私も息苦しく、手の豆がはじけて真赤になつておりました。その時、先代の社長が一喝されたのです。「お前らのは坐禅ではない。喧嘩だ！こんな事をしたらいかん！」気がつくと、私は社員の方々と仏の慈悲で心と心が結ばれたのでした。

それ以来、ナリスの方々にはさまざまな事業で援助をしていただき、こうして、開基家として、善光寺を護つていただいているわけであります。ナリス化粧品では、私が伺うたびに今度は何の無心かとゾツとしたと述懐しておられます。それでも、幹部の或る人は、「わたしたちはあきんどですから、きれいな心は持ちあわせておりません、でも、もうけたお金を人様のために使つてくださるのが先生だったのです」と、

ありがたい言葉をくださったのが忘れられません。

実際、私の要望は、単にお金を援助してくれただけにとどまりませんでした。一九七〇年に完成した本殿および客殿百二十m<sup>2</sup>は、このナリス化粧品によつて建立が成ったものであります。私は、会社単位ではなく、一人一人の小さなお金を集めてほしいと、めんどうな願いをしたのであります。これを忠実に守つてくださり、約千名にのぼる社員から淨財を喜捨てていただきことができました。ひとりひとりの願いが、やがては大きな実を結び、ひとりひとりに確かな功徳を及ぼすことを私の願いとしたからであります。

開基家との出会いはそれくらいにして、次に現在、善光寺では「成寿」という不定期の季刊誌を発行しておりますが、ここに使われている仏画はすべて、伊藤三喜庵先生の作であります。

先生は日本でも著名な設計家伊藤喜三郎氏で実は、釈迦殿の設計も、伊藤先生の手になつたものであります。この伊藤先生とは、今から二三十年前、インドへ行く飛行機の中で知り合い、以来、様々な形で善光寺の護持に尽力していただいております。また、前總持寺副監院であら

れた龍光寺住職佐藤俊明老師とは、十年前タイへの旅行中、親しく言葉をかわしていただきたいのがご縁で、善光寺の様々な企画に参与していただき、善光寺の頭腦中枢ともいべき尊師であります。私は、父のように慕わせていただきております。他にも、善光寺で働いてくださつておられる方々おひとりおひとりが、私の手となり足となつて私の足らない部分を精一杯補つてくださつております。私は、まさに非力な人間であります。自分ができないことは、力のある他の人の手助けをいただくことにより事は成せるのです。

人によつて生かされ、人によつて救われた経験を生涯忘れることなく、人のお力を借りしながら、大きな目的の為に更に精進したいと思ってやみません。微力ながら、私ができることは一体何であろうか。

## 海外留学僧派遣育英会設立

(仏教寺院の役割と檀家組織)

世の中の人が心から願う救い、その救いへ導くのが宗教家の使命であるならば、それをおいて私の使命もないと考えます。ひとりの力がたとえ非力なものであつても、支え合いながら十人、二十人と底辺が広がつて行くのなら、絶望的だといわれる未来にも太陽がさしこむはずだろうと思うのです。あの雨の日に、女学生が、三円(一セント)、五円(二セント)と喜捨きしやしてくれ、ようやく息がつけた時に差し込んだ太陽

のよう…。

私が掲げた次の大誓願は、そうした人づくり、人を育てることであります。

不安の絶望の危機に瀕した現代の社会ほど、釈尊の教法宣布を必要とするときはあります。

日本は、世界最大の仏教国でありながら、仏教界は、遺憾ながら、直接収入につながる仏事と司ることが寺院の大きな目的であるというふうに受けとめているのが現実で、世界の大勢に即応して教化の実をあげる態勢に欠けております。宗派佛教に枝分れした現在の日本では、信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、各宗派が一丸となつて事に対処するにはどれだけ待てばいいのでしょうか。すでに窮地にはまりこんだ情勢の中で、「今」すらも逸していつの時を待つか。滅びの道を突き進むその速度を少しでもゆるやかにするために一人でも多くの人が

力をあわせて、いしづえを築きたい。私は、新寺を建立した初心に立ち還つて、本当に人を育てるための海外留学僧派遣というこの大誓願を成就しようと発願いたしました。

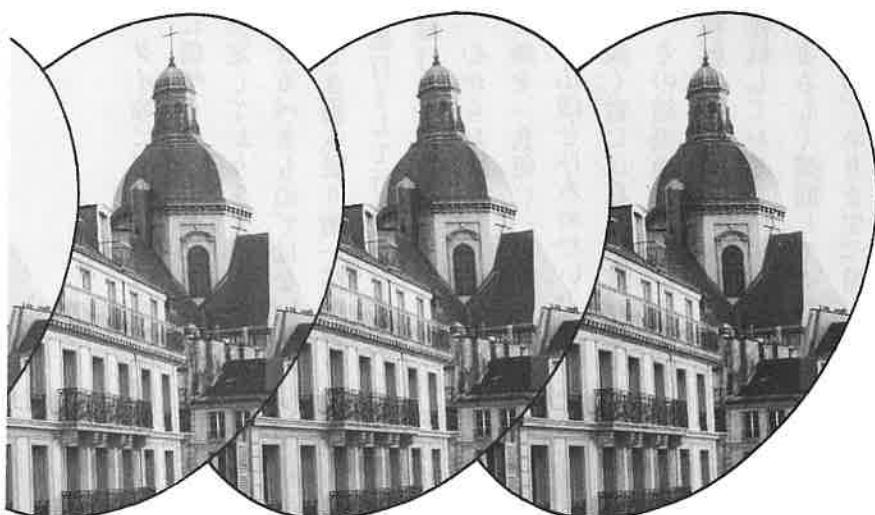
善光寺が開創十五周年を期して「海外留学僧派遣育英会」を発足させたのは、こうした趣旨によつてであります。報恩行の一端として海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もつて仏教を振興し世界の平和、人類の進運に寄与したいと願うものであります。募集の範囲は宗派を問わず、場合によつては僧籍がなくともよし、学業操行とともに優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るぎないこと。仏法のため、人のためなら、自らの身命も惜しまざる人材を選んで留学させ、そのための旅費、生活費はすべて面倒をみようというものです。すでに、第一期はタイに二名、第二期はアメリカ二名、インド、スリランカ等に四名、第三期は、アメリカ二名、



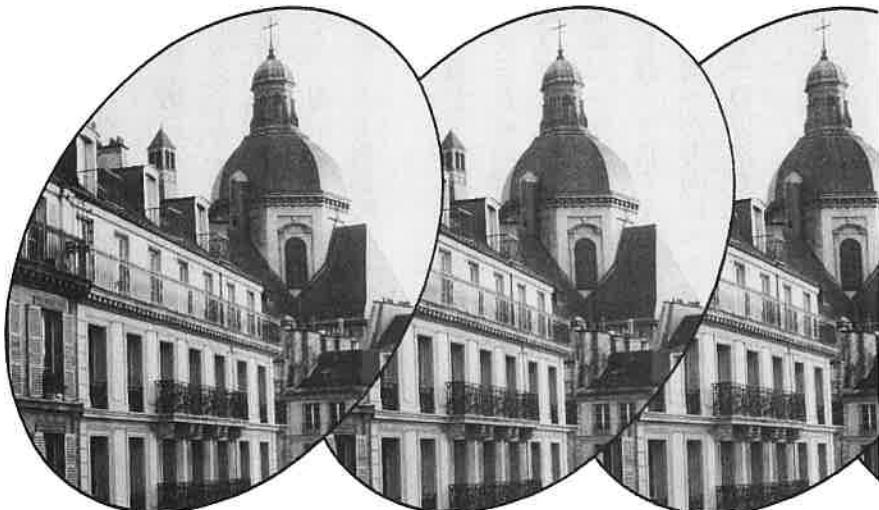
インド、タイ等に四名、その他に中国人を、駒沢大学に留学させ、計十一名となり第四期生もすでに決定しております。こうした事業は、一ヶ寺で成せるべきものではないかも知れませんが、私ができ得る限り精一杯の力を出し切つて生涯、報恩行として行きたいと思っております。この難行を実行するにあたり、私は檀家の方々に、心からおすがりしてお願ひをいたしました。ご飯を一食毎に一口だけ減らしてください。それで仏法をひろめたい…と。私は、『眞実に仏法を説く者には眞実を求める人々が集まつてきて、その結果物質面でもうるおうようになる。法輪転ずるところ、食輪自ら転ぜられる』ことを確信しております。これが仏天の御加護ならば、まさしく援助してくださる檀徒の方々は仏そのものであります。「檀家を敬うこと仏のごとくすべし」という瑩山禪師の教えを、ひたすら実践することが、現在の善光寺を形づくり、

海外留学僧派遣という一大事業を可能ならしめたと思ひます。各国に派遣された留学僧たちは、それぞれの立場で物を見、考え、修行という形に集約させて帰つてくるであつましょう。自ら国を選ぶのですから、当然、その国で学ばなければならぬという目的と意図があります。彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、それは全くの未知数ではあります。必ずや宗派意識を超えた本来の姿の仏教徒、死者の供養だけを生業とするような安易な生活者ではなく、釈尊の教えを情熱をもつて布教する宗教者になつてくれるであろうことを私は信じています。仏を信じるよう彼らを信じ、やがて十年後、二十年後の世界に活き生きとした仏法の泉を湧かせてくれることを思う時、私の限りある命が、世の中に何がしかの役に立つという充実感に浸ることができます。

この海外留学僧派遣育英会には、善光寺の総



力を集めた上に、今日における日本の碩学中村元先生、高崎直道先生、鎌田茂雄先生、奈良康明先生、東隆真先生等をはじめ、各界の第一人者約三十名を擁して顧門として助言を呈してくださいます。留学僧の受け入れ先としては、タイ国においては、かつて、私自身が修行したことのあるゆかりの寺、ワット・パクナム。ここでは、戒律のきびしい上座部仏教（小乗仏教）の僧院生活を一年間もしくはそれ以上、実地に体験し、得度式や、布薩式<sup>ふさしき</sup>を終えることになります。インドにおいては、すでにカルカッタ大学の印度哲学科に在籍する留学僧を含めて、新たに受け入れ寺院の確認を得るために、今春、常務理事の佐藤俊明老師と共にインドに渡りすべての手続きを終えました。アメリカは、ロサンゼルス禪センター、ゼンマウンテン、ニューヨーク・ゼン・コミュニティ他との受け入れが整いました。ロサンゼルス禪センターは、



全米に十一、イギリスのロンドンにも支部を持ち、米人出家僧と、在家信徒の共同体で、開創は実兄の前角博雄師（母方の姓を名乗る）で、

私もアメリカでの修行の大半をここで費しました。インド、タイ、アメリカといった国々は、

私が転々と放浪し修行した足跡をたどるような形となりましたが、これも、今日のための仏縁を作つていただいていたのだと思えてなりません。

今後は、ヨーロッパの各地にも拠点を設けて、更なる勉学の場所を広げるべく、着々と準備が

とのいつゝある現状であります。役員はすべて無給でこの難事業に参与してくださつておられることは、感謝のほかありません。檀家の方々の尊い援助と、労力を惜しまない顧問、役員の方々のご尽力に支えられて、「海外留学僧派遣育英会」から飛び立つていった留学僧たちが、各國との相互理解をいしづえに、いつかは世界に

仏法を広めてくれるだらうことを信じて、私も生涯をこれに身を投じたいと願つてやみません。

### 宗祖を通して釈尊に還る

私の宗教生活の基盤は、「宗祖を通して釈尊に還る」ということであります。宗祖である道元、瑩山両禪師は、釈尊につながる仏教を純粹に説かれました。私はこの点を特に大切にして、宗祖と釈尊をつなぐ釈迦殿を建立したのであります。

「宗祖を通して釈尊に還る」という言葉は、自分を律するための言葉でもあります。本当のものを見つめて、本当のものを創り上げていく信念を忘れないためであります。いつも仏法の原点に立ち還つて自らを見つめることは、ややもすると間違つた方向につき進むことを制御してくれる唯一の方法です。ありがたいことに、

私たちみな、自らの道を護つていただきたい  
るわけなのです。そうして生かされている命を、  
一滴残らず仏法のために、人のために、使い切  
つてから一生を閉じよう！現世での仕事をし尽  
したあとの未来は、仏にまかせて安心して歩い

ていこう！

ご静聴に心から感謝いたします。  
ありがとうございました。

合掌。

